



2013.12.1.

12月 ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

幼稚園で子どもたちは、世界YMCA・YWCA合同祈禱週に自分中心の祈りではなく、他者のために祈ることを経験し、また国際協力募金を通して自分の小さな力でも他者のために役立つことを知っていきます。そして、クリスマスを迎える4週間前からアドヴェント（待降節・降臨節）に入り、クリスマスを迎える心の準備を行っていきます。

クリスマスは決して自分の喜びだけのために訪れるものではありません。自分自身が、神様と多くの人に愛されていることに気づく時であり、プレゼントも受け取る喜びで満足するのではなく、他者に贈る喜び、他者に役立つ喜びを感じる時となることが大切です。オー・ヘンリーの作品に『賢者の贈り物』という本があります。登場するのは貧しい若夫婦です。愛する妻へのクリスマスのプレゼントを買うために、夫は父親から譲られた大切な時計を売り、妻が欲しがっていたベッ甲に宝石をちりばめた櫛のセットを買いました。また、妻はとても大切にしていた自分の長い髪を売って、夫が欲しがっていた金時計につけるプラチナの鎖を買いました。二人はお互いプレゼントを買うために、その大切な宝物をお金に換えたのですが、そのプレゼントは役にたたなかったのです。ではこの二人は愚かだったのでしょうか？決してそうではありません。この二人のとった行いは一見愚かに見えますが、実はこの相手を思いやる心が、本当に大切な贈り物なのです。そして、この心がお互いに最もうれしいことだったのです。

この作品を通して感じるのは、贈り物はもらうことよりも、あげることの方が価値があるのではないかということです。自分の贈り物を相手が喜んでくれることがうれしい、そのことを一生懸命に考えること、相手に喜んでもらいたい、幸せな気持ちになってほしい、と願うことが大切だと訴えているようです。

クリスマスは、神を離れて暮らそうとした、病める人間の世界に対して、神様が最も必要なものとして、たった一人の御子イエスを贈って下さったことを感謝し、お祝いする日です。そして神様がその御子を通して示して下さった様に、受ける喜びよりも、与える喜びを創り出す愛を大切にする日でもあります。そしてその与える贈り物も、単にお金をかけるだけではなく、自らの思いや愛情を、言葉や行いによって伝えることが大切であることを教えてくれています。『賢者の贈り物』の著者も、クリスマスが習慣化して派手になる反面、クリスマスの精神が失われていくアメリカの世相を悲しんで、この短編を書いたのではないかと言われています。

子どもたちが、他者への思いやりと、分かち合う喜びを持ち続けて成長することを祈り、感謝と喜びをもって共にクリスマスを迎えたいと思います。